

られること、森林伐採地に堆積地ドリーネが集中することに代表される。

カルスト台面は、わずかドリーネ・ウヴァーレ等に居住・耕作の場としての利用が見られたが、大部分森林であり、薪炭用材を提供する場となっていた。現在ではその樹木旺盛な自然環境の再認識に基づき、新しい適応形態として、林業開発の展開を見、スギ・ヒノキの植林が進行している。これは、他のカルスト地域における草原利用あるいは耕地開拓という形態と比較すれば、極めて特異な存在である。

近江カルストにおける一般性については、主にロックコントロール、地形的制約が明らかに認められるが、上述のごとき地形的特徴・カルストと森林との結びつきに見られる特異性については、種々の生成因子のうち、他の因子による影響の大きさが考えられる。それを、気候——年間の降水量配分の均質性、積雪をみるという特異性を有す——であると予想するのであるが、本論文では実証的解明には至っていない。

従来、地中海地方のタイプから、幼年期にあると説明されたままになっている近江カルストであるが、その発達過程の再検討をする必要があり、それには今後、気候因子を重視し定量的分析を推し進めたい。

蘭業における生産流通構造の地域性

—岡山県都窪郡早島町と熊本県八代郡千丁町の比較研究—

藤 沢 弥 生

蘭業における生産流通構造の地域性について、岡山県都窪郡早島町と熊本県八代郡千丁町をとりあげ、具体的な項目別に比較検討を行なった。

岡山の蘭草は、熊本の蘭草に比較して、質が良く、反当収量、単価が高く、粗収益が多い。しかし、岡山の蘭草生産費に占める労働費の比率は熊本に比べて高い。従って熊本の蘭草は、粗収益が少ないにもかかわらず利潤が多い。

岡山の蘭草は、一戸当たり作付面積は少ないが、蘭草の質と量を高め、所得を追求する経営であり、熊本の蘭草は、設備投資を行い労働力を節減し、規模の拡大をはかる、利潤追求型の経営といえる。

岡山の蘭作地域においては農業と加工業の分化が進展し、農民的加工の外に、零細工業が相当成立しているが、熊本では、生産加工一貫形態が大部分である。加工業の多くは、原草移入により畳表加工の付加価値を形成している。

現在の流通の概要は“生産者（加工）→産地問屋・共販→消費地問屋→畳屋”の流れが主力になっている。

価格形式には供給、すなわち全国蘭草作付面積の増減が直接的に影響するものの、各流通関係者の思惑や経済的な力関係によって異った価格を形成する。

このような生産流通構造の中で、岡山県の蘭草生産は昭和39年をピークに減少を続け、熊本県は昭和43年に岡山を抜いて以来全国一位の生産を維持している。

この変化をもたらした主な原因として、水島臨海工業地帯からの卓越風が引き起こした岡山県南蘭業地帯の蘭草の先枯れ現象、岡山市・倉敷市など隣接地域の工業化・都市化が提供した農外収入、岡山県蘭作農家の後継者不足の問題がある一方で、農業県熊本の蘭業地帯の機械化・省力化による振興が考えられる。また、熊本では後継者も確保されている。

将来、岡山では、他県からの原草蘭草買付によって、花菴、畳表の生産、伝統が受け継がれ、熊本では、安定した蘭草生産、畳表生産の維持が予測されるが、岡山に於いても、熊本に於いても、県・農業団体一体となって蘭草生産振興対策を推進している。

岡山、熊本両県蘭業の発展衰微の実態原因を探るとともに、今後の発展を期待する次第である。

新島本村の地下水を中心とした地理学的考察

松 永 富久子

新島の水利用形態を考えると、それは「地下水依存型」として、他の伊豆島嶼地域のそれとは異なった独自の位置づけが考えられる。本論文では、この新島の地下水に関して、その地質的、水文的環境の考察を行ない、地下水の賦存状態を明らかにし(第1章・2章)、同時に、人文的諸活動の変化から地下水取水の実態を把握した(第3章)。以下に、これらの地下水を取り巻く諸環境をまとめる。

当地域における地下水取水量の増大は、夏季に集中する観光客によって引き起こされる。夏季の地下水取水量は平常時の2.5倍以上にもなっている。

このような地下水取水の影響は、地下水位の低下となって現われている。当地域の簡易水道水源は、本村地区用の水源では白ママ層から、また式根送水用の水源では、その下部に存する瀬戸山、大三山系火山噴出物層から取水しているが、このうち本村地区用の3つの水源では地下水位がマイナス値となる異常な低下を示している^{*}。取水開始前との水位の比較によっても、取水による水位の低下は明らかである。

更に、島という特殊な環境下では中央低地の簡易水道水源地域における水循環システム中への入力
は降水に大きく左右されることを考え、降水量と蒸発散量の関係から水収支の考察を行なった。2つの方法で求めた結果、数値上の問題点を残してしまっていたが、これにより年間の水収支の動向が明らかとなった。即ち、新島は年間を通して水余剰が見られ、気候的環境を見ると、水不足を引き越す状態にはない。しかし、7月、8月の水余剰が著しく少ないことは着目すべき点であった。

以上の地下水を取り巻く諸環境の考察から、夏季の2カ月は水取水量が年間の中で最大になること、かつ同時期において水余剰が年間で最も少なくなることを考え合わせると、次のことが問題となった。

第一に、夏季の取水量の増大に伴う地下水位の低下が、やがては塩淡水の平衡が破れることによって生じる塩水の浸入を引き起こすのではないかとということ、第二に、水使用量の増大に伴い排水される生活污水が、地下水の汚染に影響しているのではないかとことこの2点である。

上記の2点については、実態を明らかにする為に地下水の水質を測定した結果、次のことが明らかとなった(第4章)。